季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

春号
2005
3,4,5月

「高田」のまちにこめた祈り

❖「地震」❖

巻頭エッセイ◉このまちのこと

被災地で見えてきたこと

【カメラの眼】

◉埋文センターへ行ってみよう◉

季刊 直江の津 第17号 春号
2005—3・4・5

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
被災地で見えてきたこと　寺島善雄　3

■「高田」のまちにこめた祈り　中西　聰　4

■地震　12

■上越地方の地形と地震の可能性　高野武男　19

■カメラの眼　26

■読書びと　やがて麗しい五月が訪れ　原篠あき子全詩集
池澤夏樹編　28

■東西海陸　29

■歴史の風景　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



春を呼ぶまつり
（春日山下　春日神社春祭り）

♣巻頭エッセイ
寺島義雄さんのこと

新井市生まれ
(有)ラポール代表
ＮＰＯまちづくり学校運営委員（ワークショップ運営関連部担当）
上越地域での地域づくり・まちづくりの先がけとも言える人。草の根に徹し、いわゆる「仕掛け人」とは無縁。
直江津地区のＴＭＯ「なおえつ茶屋」や地域通貨「だすけ」にも力を発揮してくれている。
中越地震発生以来、小千谷でボランティア活動の事務局を担当している。

被災地で見えてきたこと

寺島義雄

荒川橋の袂に突き出た洗い場で菜っ葉を洗っている写真を見たことがあります。洗い場には肥桶も置かれ、障子戸を洗っている人もいたように記憶しています。ほかに石炭の荷揚げをしている写真もありました。ずっしりと石炭の詰まった背負子を背負い、厳しい冬に立ち向かう姿……。

昭和二十～三十年代の生業がそのまま映し出され、直江津の女子衆のしなやかさと強さが同居した姿が、厳しくも柔らかくも見えました。

わたしは今、小千谷市のボランティアセンターにいます。

被災された皆さんが重い口から少しずつ語ってくれた、昨年十月二三日午後五時五六分に起きたことは、本当に凄惨なものでした。崩落した土砂で堰き止められた川の濁流に、胸までつかりながら、一人暮らしのおばあさんを背負って高台へ非難したおじいさん。道路が寸断され、真っ暗闇の山を越えて子供たちの待つ家へたどり着いたおとうさん。自宅に帰れず二日間も子供に会えなかったお母さん。すべての人に、文字通り死に物狂いの時間が過ぎました。

ひと月後、全地区に避難勧告が出ている状況でしたが、ようやく東山地区に入ることができました。その被災地で、直江津の古い写真と同じような光景を目の当たりにしたのです。

家の片付をしている傍らで、せっせと大根を洗っているおばあさん。家は傾いているのに、その軒先には大根が干してあります。一階はほとんど水没した家も二階の窓には、ちゃんと大根が干してありました。銀杏を道端に干している家。野沢菜が少しこわくなってしまったと嘆くおばあさん。

そして、坂道を豆がらを背負って降りてくるおばあさんに出会いました。「なんで豆がらなんだ?」と同行者と首をかしげ、そして目が潤んできました。

「小千谷は回復する」。同行者は信じたようでした。

短い間に、すでに「収穫し、洗い、干す」という、冬を前にしたごく当たり前の日常が繰り返されていることに驚きと大変な感銘を受けました。

写真に写る人たちと、この人たちが持つ「しなやかさと強さ」は、いったいどこから来るものなのでしょうか? 私たちからは次第に遠ざかっている、

――山や森や川や海が、人と、そこに今も共にある――

そのことがしっかりと、体に植えつけてあるんです。最近ようやく分かって来たことですが……。

「高田」のまちにこめた祈り

上越市教育委員会　学芸員　中西　聰　なかにしさとし





図1

雪の高田

日本有数の豪雪地として知られる上越市高田。まちが覆われるほどの雪深い様子を表現した「この下に高田あり」ほど高田を象徴する言葉はありません（図1）。

その高田城下町は江戸時代のはじめ、松平忠輝（ただてる）によって建設されました（図2）。ここで注意したいのは、高田が江戸時代以前にあった集落が拡大、発展して城下町になったのではなく、人工的に造られた全く新しいまちということです。高田の方に怒られるかも知れませんが、かつて何もなかった所、人もあまり住めなかった所に突如として大城下町が出現したのです。忠輝は、高田に城を築く四年前に直江津にあった福島城（図3）の殿様として越後にやってきます。そして、福島城を廃して新たに高田城（図4）を築くわけですが、この時から、高田と雪との宿命が生じました。四年間の直江津生活で、高田は雪の多いことがわかっていたはずなのに、忠輝はなぜあえて雪深い地に城を移したのでしょう。この「はてな?」を切り口に、こんなナゾ解きはいかがでしょうか。

高田築城のナゾ

高田への城の移動については、これまで多くの方がいろいろな説を提唱されてきました。代表的なものをあげると「地形的に最適」「防衛面で有利」「交通の要衝」の三点に集約され

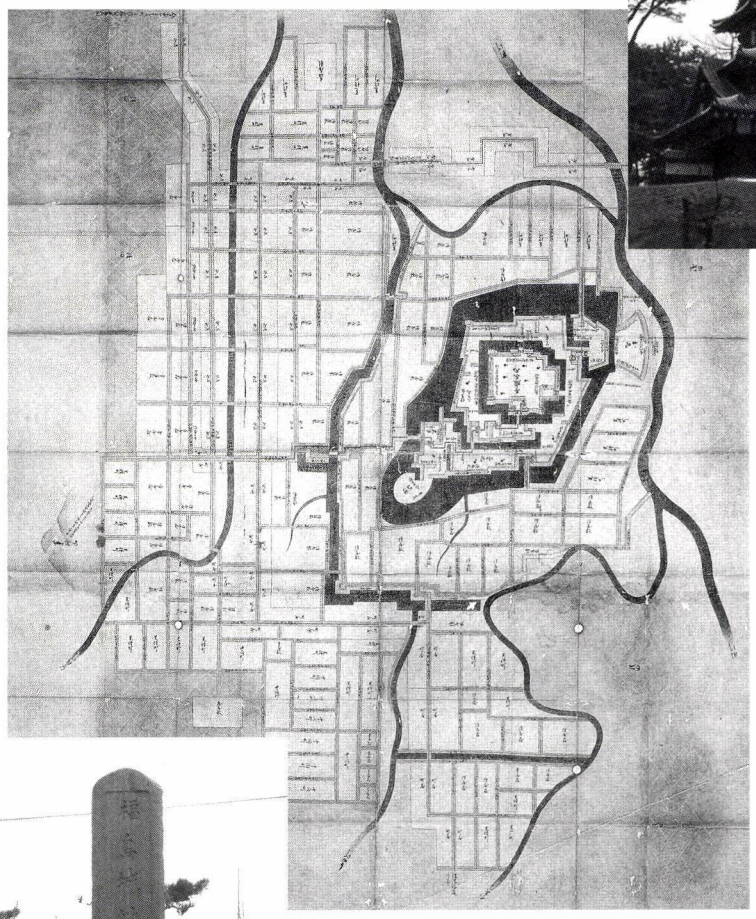


図2

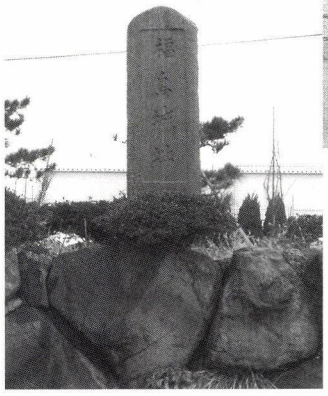


図3



図4

図1　1927（昭和2）の豪雪

「高田測候所（気象庁）は、積雪深377㎝（1945年2月）という気象官署としての「日本記録」をもって」おり、そして上越市板倉区「柄山では、1927年2月に818㎝の積雪を記録したとのことで、人が住むところとしては積雪深日本一（同時に世界一）とされています。」（横山宏太郎「上越の雪と人、五〇〇年」「雪氷」66巻2号、日本雪氷学会）。

図2　高田城下図（上越市立高田図書館蔵）

正保絵図（1644～47）の控、もしくは模写と考えられています。1655年（寛文5・高田地震）の地震前の初期の高田城下の様子を知ることのできる現存最古の資料です。

図3　福島城址碑（港町1）

図4　高田城三重櫓（1993年復元）

＊

注1　一例をあげると、政治の中枢高田城は、武家屋敷とともに低地（関川の氾濫源、関川面）に立地し、一方、職人町・商人町・寺町は城・武家屋敷より一段高い高田面に立地します。これでは城・武家屋敷は、これら庶民の町から見下ろされる格好になってしまいます。士・農・工・商の身分制度を重んじた江戸時代にあって、政治の中枢を庶民より低地に配置する例は他に知りませんし、過去の水害をひもといても関川面が大被害を受けています。

るようです。これらの解釈は高田という土地の利点のみを強調されています。しかし、先ほど触れたようにそれまで人も住めなかったような所が、はたして城を築くための最適地なのでしょうか。私は、そもそも高田の地が関川という高田平野を流れる最大の河川の氾濫源なので立地・水害・都市計画の矛盾（注1）などの点から必ずしも最適地とは評価できないように思います。そして何より「雪深い」地へ、あえて城を移したことに対する明快な回答は、これまで得られていないのです。

　すると、高田城の位置については、様々な条件から選ばれたというよりも、むしろ城が「ここ」でなければならない、という前提条件が読み取れるのです。私は「なんで高田なんだろう?」と首を傾げながら、ずっと地図とにらめっこしていました。そしてある時、おもしろいことに気づきました。まず忠輝が最初に入封した福島城の本丸と、新たに築いた高田城のそれの位置に注目して直線で結んでみたのです。すると、興味深いことにこの直線が「真北」の方角とぴったり一致するではありませんか。さらに、双方の直線距離を測ると八キロメートル、当時の単位でいえばちょうど「二里」離れていることもわかったのです。地図との格闘から高田城本丸は、福島城本丸のまさに真南に二里離れた地点に築かれたことを発見したのです。ではこの符合が単なる偶然なのか、確かめてみましょう。

　そこで注目したのが、高田城が完成するまでの暫定的な政庁として設けられた「御仮屋（おかりや）」です。忠輝の義父にして高田城の工事責任者である仙台藩主伊達政宗が、実際にここで陣

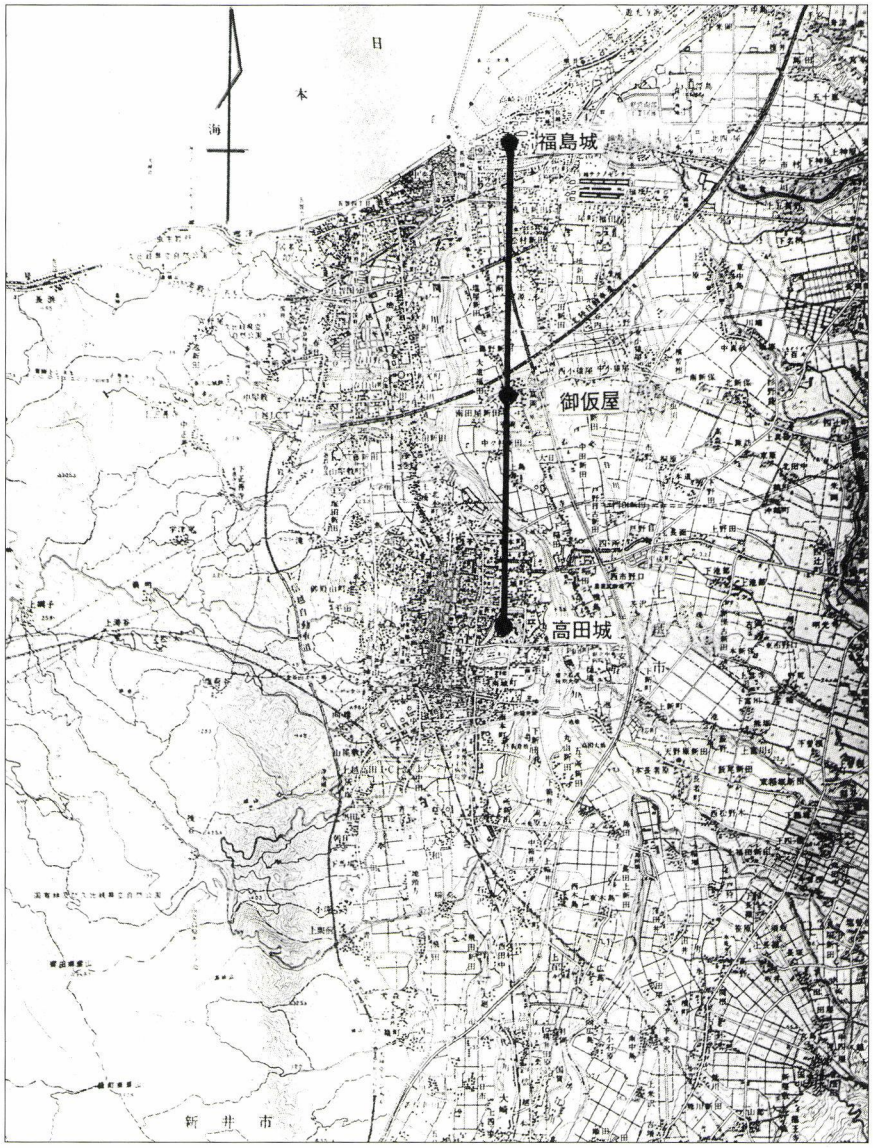


図5　上越市全図（部分、原図五万分の一を縮小）

頭指揮をとったことが記録に残されています。そして、御仮屋の地名は現在でも市内富岡に小字名として残っているので、その位置を特定することができます。そこで改めて御仮屋の場所を見てみると、先ほど福島城と高田城とを結んだ南北ライン上に重なるのです。しかも、双方のちょうど中間地点に御仮屋が位置していることも確認できたのです。

これまでの仮説を整理すると（図5）のようになります。福島城―御仮屋―高田城は、南北ライン上に等間隔で設置されたことがわかります。この規則性から、高田の地がこれまで指摘されたような「最適地」という評価ではなく、方角と距離とによってあえて選ばれた場所と仮定できると思います。地図上から高田城の選地にあたっては、福島城から真南の方角へ二里のところに城の中枢を移動する、という築城計画が第一条件になっているのではないでしょうか。この仮説を試みるうえで興味深いのが、実は占いによって築城位置を決定したということです。

高田築城にあたって、忠輝の母の茶阿局（ちゃあのつぼね）が幕府の顧問といってよい金地院崇伝（こんちいんすうでん）に新しい城の位置の吉凶を占わせていることが記録に残っているのです。茶阿局の「今いる福島城の南の方に新しい城を築きたいが吉凶はどうか」との問いに、崇伝は「一段と良き方」と占いの結果を導き出しています（注2）。

このやりとりから、忠輝は新城の選地にあたって明らかに占いによる方角の吉相、つまり「真南への移動」を重要視していたことが伺えます。そして占いに従ったのは、後述するように高田城が軍事目的ではなく、戦のな

注2

（茶阿局が崇伝に占いを依頼した書状）

越後少将様御むまれ月日。八月九日。いま御座候所よりみなみのはうに。しん城御とりたて候。よく候や御らんじ可被下候

御とし廿二

七月十三日　かうさうす

松しゆそ　まいらせ候

（崇伝からの返事）

越後少将様御むまれ年月日御かき付はいたし候。ことし南へしん城御とりたてなされ候方の事。御たづねなされ候。なにのさしあいも御座なく。一だんとよき方にて御座候まゝ。此よしおふくろ様へおほせ上られ候べく候。めでたく　かしく

七月十四日　（崇伝）

かうさうす様まいらせ候

「本光国師日記」（『大日本仏教全書』第一三八冊、所収）

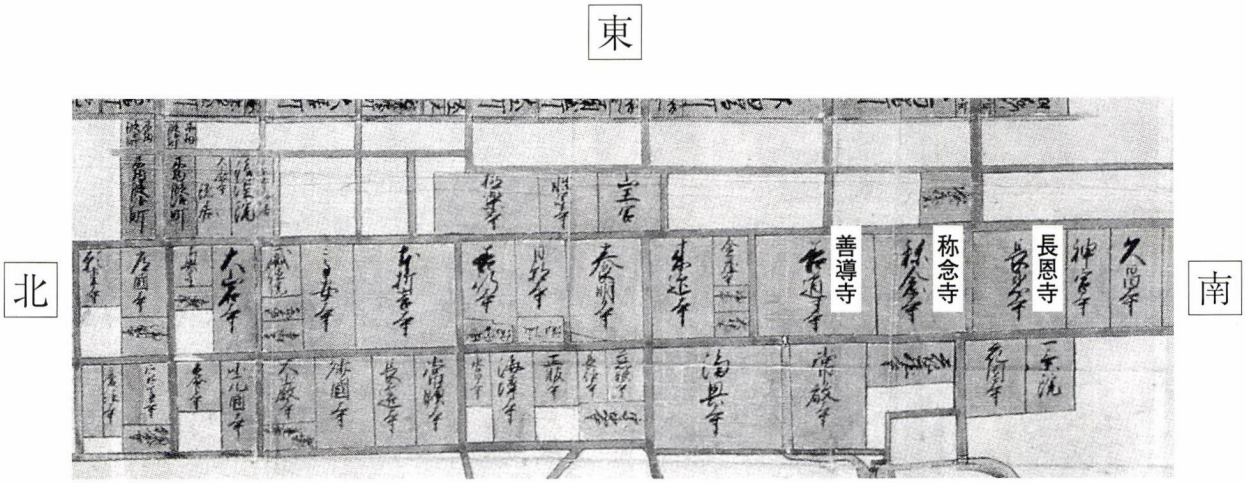


図6　高田城下図（寺町の部分、一七三七年、上越市立高田図書館蔵）

い平和な城下の実現をめざしたためではないか、と想像しています。

高田平野の景観

高田城の位置が占いによるものならば、城下の整備においてはどのような工夫を凝らしていたのでしょう。ここでは、寺町に焦点をあててさらにナゾに迫ってみます。

高田城下町の大きな特長として、西側に寺院を集めて寺町をつくったことがあげられます（図6）。今でも六六もの寺院が集中しており、全国的にみても規模の大きな寺院群として知られています。また、寺町の寺院を宗派別にみると、半数以上を浄土真宗が占めており、さらに、広大な境内をもつ浄土宗・時宗の大寺院を含めると、いわゆる浄土系寺院が圧倒的に多いのも特長です。

それではなぜ城下の西側に寺院群を配置したのでしょうか。この「はてな?」について、これまでの説明では城下の西側を防衛する、という軍事的な理由が強調されてきました。とくに当時、幕府と敵対していた加賀藩からの攻撃に備えるため、という説がいわば定説のようになっていました。しかし、防衛上最も重要と思われる城下北西口にあたる陀羅尼口の寺院配置が稀薄な印象をぬぐえません。また、寺町のほとんどの寺院は、高田城の方角（東）を向いて本堂が建立されていますが、西側の仮想敵に対する防衛が目的であれば、なにも寺院を東面させる必要はありません。寺町の特異な配置は、外敵に備えるためと理解するよりも、別に理由を見出だすべきでしょう。

この問題にアプローチする方法として、高田平野の景観に目を転じてみましょう。高田平野を見渡すと、まず北東の米山と、南西にそびえる妙高山の山容が視界に入ります（図7）。いずれの山も、古くから上越地方の象徴であったことが多くの記録に残されています。米山は「米山薬師」と呼ばれていたことからもわかるように、薬師如来を本地仏とする信仰の山です。薬師如来は、東方瑠璃光浄土の教主とされ、現世に利益をもたらす仏として信仰されています。一方、妙高山も、もともと仏教世界の中心にそびえる山「須弥山」をさします。妙高山の本地仏は、西方極楽浄土の教主、阿弥陀如来で、来世の極楽往生を願う仏と信じられてきました。

ところで、堀辰雄の『大和路』で有名な浄瑠璃寺（京都府相楽郡加茂町）は、境内中央の宝池をはさんで真東に三重塔（西面して薬師如来を安置）、真西に本堂（阿弥陀堂、東面して九体の阿弥陀如来を南北一列に安置）を配置した、いわゆる浄土庭園をもつ空間となっています（図8）。浄土の理想郷を再現しようとした願望をあらわした遺構といわれ、こうした空間は、藤原道長が創建した法成寺をはじめ、数多く造営されたことが知られています。

ひるがえって高田平野の景観は、東方の薬師如来（米山）と西方の阿弥陀如来（妙高山）とに挟まれた空間、すなわち浄瑠璃寺に見るような浄土世界をそのままあてはめた景観と、私たちの祖先は捉えたのではないでしょうか。

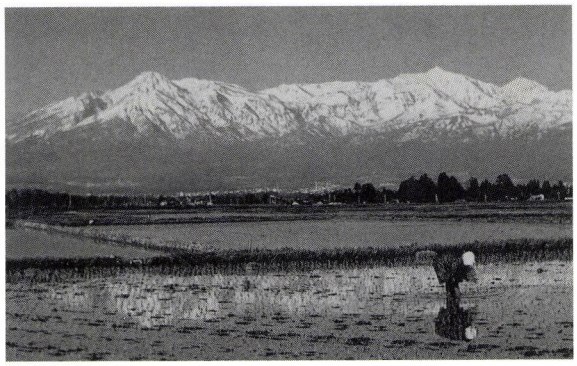


図7　高田平野から望む西方極楽浄土（妙高山）

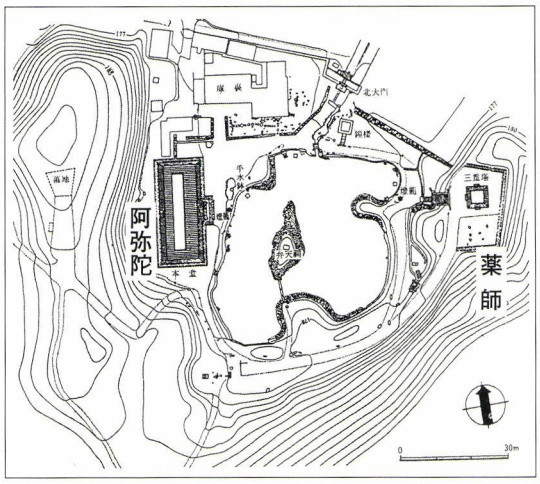


図8　浄瑠璃寺境内図（『名勝浄瑠璃寺庭園環境整備事業報告書』、1977年）に加筆

寺町の意味

高田平野の景観をヒントに、寺町の配置について改めて読み解いてみましょう。まず、浄土宗の触頭（ふれがしら）として重要視された善導寺（ぜんどうじ）（図9）を見てみると、城（総構（そうがまえ））から寺院の山門に向かって参道が一直線で通るのは、唯一、善導寺のみです。城と善導寺の位置に注目すると、高層でシンボリックな三重櫓と、東西ラインで結ぶことができ、三重櫓から、真西を仰ぐように善導寺が配置されていることがわかります。この計画は、城の移動と同じように寺院の配置に方角を重視したことを暗示します。善導寺の本尊は、阿弥陀如来（延享（えんきょう）の寺院明細帳から。現在の本尊は善導大師像）なので、この構図は三重櫓から阿弥陀如来、ひいては西方極楽浄土を礼拝する形をあらわしています。

次に、善導寺の南隣の称念寺（しょうねんじ）（本尊は阿弥陀如来像）を見てみましょう（図10）。上越地方唯一の時宗（じしゅう）寺院称念寺は、中世以来上杉氏



図9　善導寺



図10　称念寺

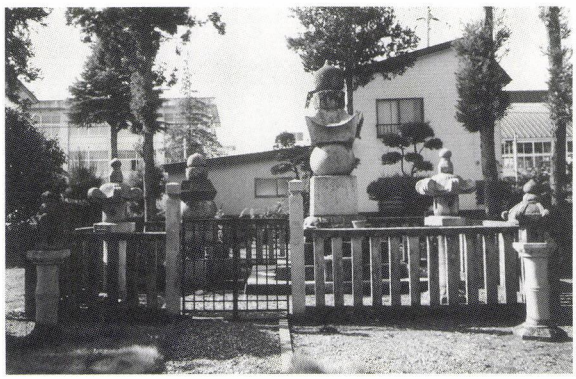


図11　天崇寺（長恩寺）廟所
向かって右が高田姫勝子の墓塔で大きさは北陸随一。左は、高松宮好仁妃寧子の墓塔。



図12　三重櫓から見た彼岸の夕日

の尊崇を集めた名刹で、江戸幕府からも朱印地百五十石を与えられていました。ここで注意すべきは、称念寺の山号が「西方山無量寿院」ということです。「無量寿」は、いうまでもなく阿弥陀如来そのものなので、称念寺は文字通り西方の極楽浄土を意識して配置された寺院といえます。

さらに、称念寺の南に接する浄土宗長恩寺（現在の天崇寺、本尊は阿弥陀如来像）は、高田藩主松平中将家の菩提所として厚い保護を受け、将軍家光の命令をうけて境内に勧請した東照宮（現存せず）、高田藩主松平光長の母勝子（高田姫、徳川家光の姉）と光長の妹寧子（高松宮好仁妃）の廟所（図11）をまつっています。興味深いのは、これらがいずれも高田城を向いて東面していることです。そして、山門から東照宮にいたる参道にそって、石灯籠が並べられていたことから、長恩寺は一般の寺院ではなく、東照宮と勝子・寧子の廟所をまつった聖地、すなわち礼拝の対象とみてよいでしょう。

以上のように、南北に連なる表寺町の大寺を例に見ましたが、いずれも城から礼拝する目的で配置したと読み取れるようです。城下の西側に阿弥陀如来を本尊とする浄土系寺院を集中させたのは、高田平野の空間、すなわち浄土世界をそのまま城下に再現し高田城から遥拝するため、といえましょう。

この仮説を確かめるべく秋の彼岸に三重櫓へ登ってみると、興味深いことに中日の夕日はまさに、真西（善導寺・称念寺・天崇寺〈長恩寺〉方角）に沈んでゆきました（図12）。その神々しい演出は、あたかも浄土欣求、いいかえれば平和への祈りを具現化しているかのようでした。

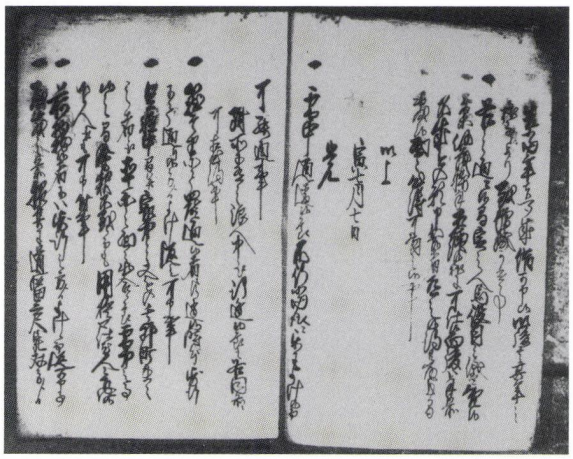
想像を重ねてきましたが、こうした舞台装置は偶然によるものでは決してなく、高田城下の真西に「西方極楽浄土」を仰ぐことは、計算された城下町の形と理解されます。高田寺町は、仏教の浄土世界に擬えた「平和」な城下建設の象徴といえるでしょう。

天からの送りもの（注3）

ここで冒頭に触れた「雪」への疑問に立ち戻ってみましょう。高田のまちづくりに「雪」はどう作用したのでしょうか。

雪国高田を象徴するものとして「雁木」があげられます（図13）。母屋から張り出した庇ですが、ここ高田が発祥ともいわれ、現存する総延長でも全国一ともいわれています。雁木は城下でも往来の多い街道筋や商家・職人町など人が集う所、家が連続する所に造られました。雁木は、特に冬期間の歩行を確保する空間として、雪国ならではの知恵の結晶ですが、興味深いのは私有財産を公共に提供していることです。雁木部分も、その下の歩道も江戸時代以来、現在に至るまで個人の所有となっているのです。いいかえれば、自分の土地を「歩道」として公に提供し、それでいて雪や雨でも通行する人が歩きやすいようにわざわざ上屋まで架けた施設、ということができます。お年を召された方から「朝起きたら、まず一番に雁木下を掃きます」と教えていただいたことがあります。こんなところに高田、ひいては上越人の気質を垣間見ることができます。そして、雁木は地域内の合意があってはじめて連続するもので、いわば雪が生み出したコミュニティの遺産なのです。

また、殿様の視点から雪を眺めてみると、高田藩主稲葉正通が興味深い記録を残しています。正通は、雪の降らない小田原藩から高田に移り二度目の冬を迎えるにあたって、家臣団に対し雪道で人とすれ違うときの作法に





上　図13　雁木（東本町三）
左　図14　「稲葉家条目」
右　「かくまき」姿は、あわゆき道中より

ついて「雪の中では身分に関係なく道を譲り合いなさい」という法令を定めています（図14）。高田の雪は、大名をして「郷に入っては郷に従」わざるを得ないもの、つまり士・農・工・商の身分を越えて、武士といえども庶民の作法に従うべきものと映ったようです。雪道で、武士が庶民に道を譲り合っている様子を想像すると少し滑稽ですが、稲葉藩政では雪によって歴史の教科書の常識を覆す「法の下の平等」が実現しているのです。

ところで、高田で特産品（名物）を探すのは意外とむずかしいようです。私も故郷へ帰省する時お土産を探すたびに困ってしまうのですが、いわゆる特産品が少ないのです。その理由は、「米」こそが江戸時代以降、特産品に他ならないからです。高田藩は江戸時代を通じて新田開発に努め、現在見るような高田平野の美田を開き、一生懸命に米を作りました。米を作りさえすれば売れたので、なにも他に特産品を開発する必要がなかった、という指摘さえあります。そして、おいしい米作りにきれいな水が欠かせないことはいうまでもありませんが、その水は周辺の山々に降った大量の雪が、春の雪解けとともにもたらしてくれます。雪あってこその「米処」なのです。

このように見てくると、雪は何より、地域コミュニティを培っただけでなく、上越独自の気質・風土・文化を育んだことがわかります。雪は現代でこそ、経済発展の弊害のように悪しきものとして捉えられがちですが、祖先の営みから学ぶのは、雪のお陰で身分を越えて協力しあいより良く生活する知恵を積み重ねてこられた、ということだと思います。築城に込められた平和への祈りが「雪」によって深化したといったら言い過ぎでしょうか。

高田の未来像

高田城下町の成立について、視点を少しかえてナゾ解きを試みました。そして高田の地は地形的な面より、むしろ占いによって決定したこと、寺町は、防衛的な面より、むしろ西方極楽浄土を礼拝するため造られたこと、そして、雪は地域コミュニティの媒体であることを指摘しました。これらから抽出した「占い」「浄土」「雪」の三つのキーワードから導かれる忠輝の高田城下建設の目的は、やはり先に述べた「平和」への祈りだったのではないでしょうか。ここに高田城下町の成立を探る重要な鍵が隠されていると思います。事実、江戸時代後期、鈴木牧之は『北越雪譜』のなかで「余越後より江戸へ皈（かえ）る時高田の城下を通りしが、ここは北越第一の市会なり。商工軒をならべ百物備ざることなし」（二編巻之一）と高田の繁栄ぶりを紹介しています。江戸時代とは社会構造が大きく変化した現代に至っても、高田が中心市街地であり続けていること、寺町寺院群が文化遺産として注目されていること、地域コミュニティの遺産である雁木が日本一を誇っていることは、築城の目的が達成されていることを物語っているのでしょう。そして、結果として高田、ひいては上越は築城以来、「平和」であり続けておりますし、歴史から学ぶ二一世紀のまちづく

りのキーワードは、やはり「平和」ではないでしょうか。

今回のナゾ解きは、あくまでも想像の域をでるものではありません。しかし、このような試みができるのも、高田が今もなお築城以来の歴史・風土・文化といった「土地の記憶」を刻んでいるからに他なりません。

二〇一四年、高田は開府四〇〇年の節目を迎えます。

注3　「雪博士」中谷宇吉郎先生は名著『雪』の中で「雪は天から送られた手紙である。」と述べ、雪の素晴らしさを説かれています。好きな言葉なのでタイトルに用いさせていただきました。

［付記］、小文は拙稿「まちの形から地域をよむ―城下町高田を行く―」（川村知行編著『地域から考える総合学習』北越出版）ならびに同「雪道の作法―歴史の視点から―」（「雪氷」六六巻二号、日本雪氷学会）をもとにまとめました。あわせて参照いただければ幸いです。

［編集部注］

高田城下町については、いろいろな本が出版されているが、小島幸雄氏「高田城下町」（太陽コレクション『城下町古絵図散歩』三・平凡社）は、わかりやすく、かつ示唆にとんだ最適な城下町ガイドとなっている。また、小誌二〇〇三年春号でも同氏は「海のめぐみ―高田のまちに見える海の印象―」と題して仲町について興味深い持論を紹介されている。

寺町にて

小島幸雄

城下町高田には、六六ケ寺という一箇所にまとまっているものでは全国屈指の寺院数を誇る寺町がある。この寺町の城下町西端への一極集中については、仏教に見られる「浄土世界」の具現化を示すものという、中西聰氏の興味深い指摘は高田の町を見る新たな視点ということができよう。このような視点から、城の変遷と町の構成を見てみたい。

周知のこととして、当地では春日山城から福島城へ、そして高田城が造られたことが知られている。

春日山城を見てみよう。府中（直江津）から春日山城を見ると、本丸から北に位置する春日山神社周辺のみ望むことができる。この周辺は春日山城で特異な屋敷の配置が見られ、いわゆる雛壇状で段階的に裾野から直江屋敷まで連続していて、柿崎屋敷や南三の丸のような独立したつくりを見せてはいない。

さて、謙信の葬儀を執行したのは「春日山北丸大乗寺ノ住持長海法印ナリ」と『上杉御年譜』に記され、城の北の丸に大乗寺なる寺があったことがわかる。また、謙信は自らの遺言で「春日山の不識院」に葬られたことになっている。このことは、春日山城の本丸北側に真言宗の寺があったこと、不識院なる坊があったことを示している。今は杉林に覆われた春日山ではあるが、樹木が繁茂していなかった戦国時代、府中からは城というよりも寺が見えたことになる。

府中から望まれる寺は岩殿山にもあった。今も、重文の大日如来がその所在を伝えている。

ところで福島城はというと、城下に寺を配置した形跡はあるものの高田城下のように集中させた気配はない。それは関川を挟んで対岸に城下町を移しただけであって、直江津にあった府中の宗教的空間を大きく変化させたものではなかったと考えられる。

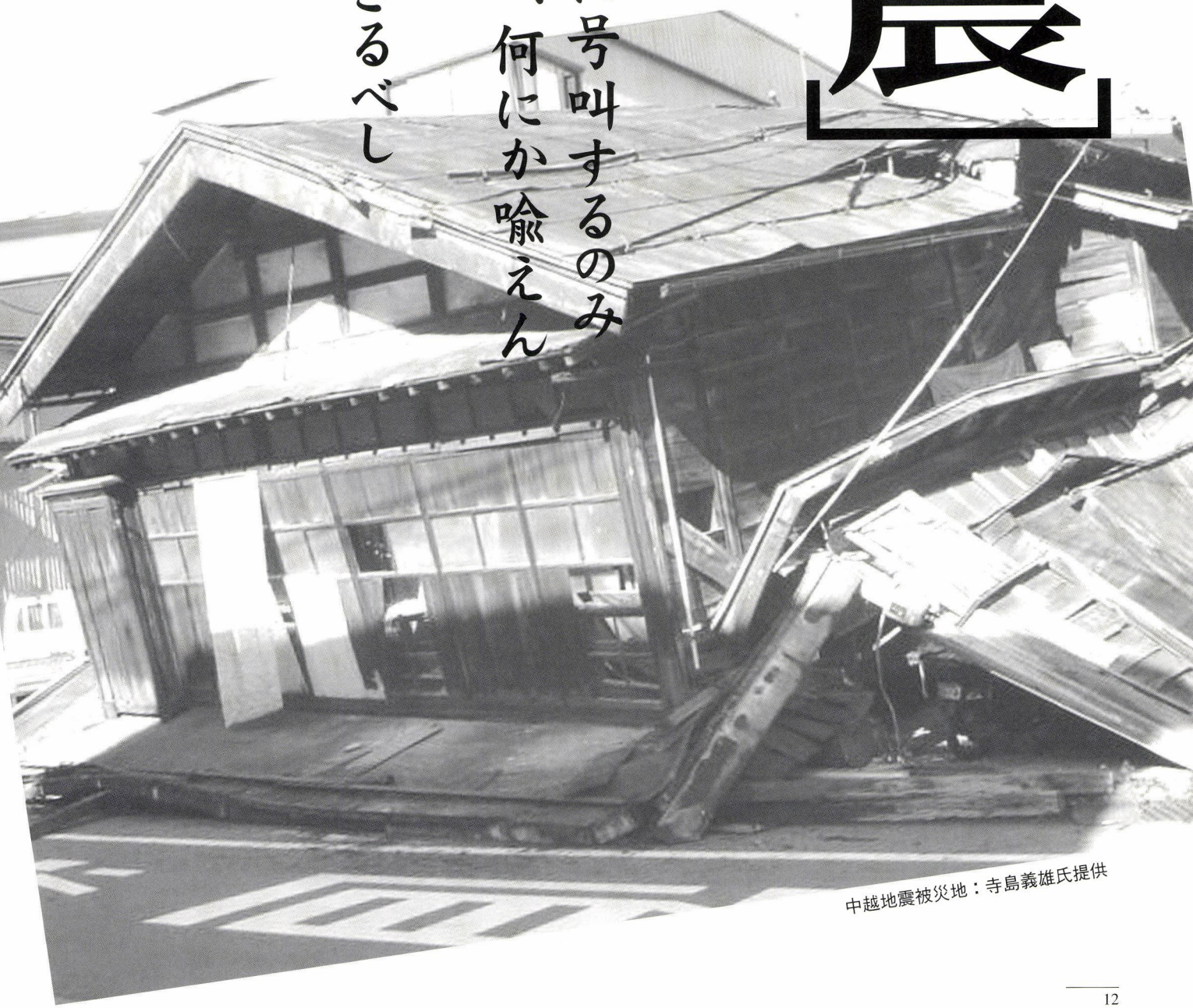
さて、冒頭の中西氏指摘の「寺町の浄土世界」はなぜ生まれたのであろうか。

私は、府中（直江津）の空間を高田に再現したと見たい。中世の真言の世界から浄土への変化はあったにせよ、西は宗教空間であることに変化はなかったのであろう。さらに、西に現世と異なる空間を作った府中の思想は何だったのだろうか。その答えを海に求められないだろうか。山椒大夫に見られるように、西は若者を導き都へ続く憧れの道、東は老婆を迎える衰退の道であったとすれば、府中の人々は西に聳える凛とした山並みを都への憧れとともに眺めていたのではないだろうか。

（上越市教育委員会　学芸員）

「地震」

唯、天地に号叫するのみ
豈、この難、何にか喩えん
逢ざる者
此を知らざるべし



中越地震被災地：寺島義雄氏提供

平成十六年十月二三日十七時五六分。
突然地面が揺れだし、上越地方は「新潟地震」でも経験しなかった大きな揺れに驚いた。
「平成十六年新潟県中越地震」と名づけられた。
その恐怖が覚めやらぬ十二月二六日、邦人を含む三〇万人を超す死者を出したスマトラ島沖地震津波が発生した。
この二つは地震の恐ろしさと津波の脅威をまざまざと見せつけた。
そして、今年は「阪神淡路大震災」から十年。
一八七四年の「善光寺地震」以来一六〇年近く、幸いにも大きな被害をもたらす地震は、この上越には起きていない。
過去の地震の記録と上越地方の地形から分かる地震の危険性を考えてみた。



長濱村
虫生村　境付近

地震の規模、マグニチュードは全て『理科年表』による。
和暦の下のカッコ内は西暦。

国立東京天文台編『[1]理科年表』平成十七年版には、允恭天皇五年（四一六）に起きた「地震（日本書紀）」から「平成十五年十勝沖地震」まで、史料に残る地震の震源地、規模から被害まで記録されており、この「年表」で見ると上越地方で一番古い地震は、貞観五年（八六三）六月に越後・越中で発生した地震である。規模は推定でM七であった。

『[2]越後頸城郡史稿』も過去の災害を多く伝えているが、「貞観の地震」を「地震の水涌きは郷党の口碑に伝えて、当郡の大変にして、大津波は妙高山の麓まで波打ち上げ、直江津の沖の島々崩壊せし」と伝えている。

以下に「郡史稿」に現れる地震を「年表」の記録と照らし合わせてみると、

・永祚一年（九八九）「大地震　大洪水あって当郡海涌山崩ありと口碑に伝えたり」（「年表」になし）

・正嘉一年（一二五七）「鎌倉大地震　当郡も地震あるか　松之山郷棚機神社及び村落（旧大島村仁上）　山崩押埋ると伝えたり」

「年表」では「鎌倉の寺社完きものなく、築地ことごとく破損」、規模はM七～七・五と記録されている。

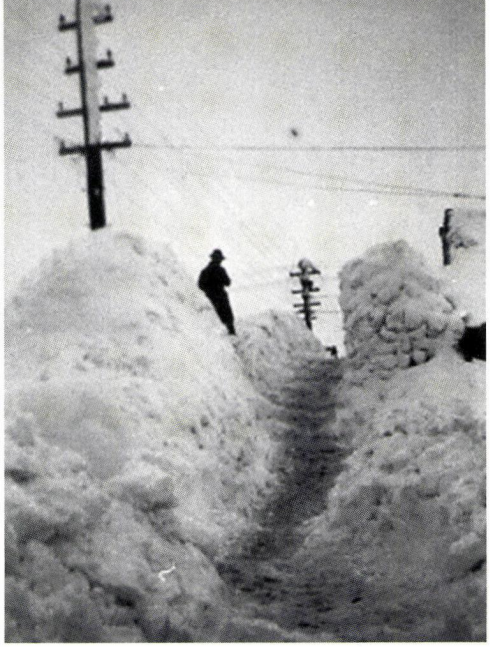
上越地方での被害が不明なものとしては、

・寛治六年（一〇九二）「越後大地震・大津波で、蒲原郡の入海全く陸地となる」（「年表」になし）

・天正十三年（一五八六）一月「諸国大地震　越中国大地震にて佐々成政の本船六百余の守兵と共に崩れて海底に沈す」

「年表」では規模をM七・八、畿内、東海、東山、北陸諸道、飛騨白川谷で大山崩れ、阿波でも地割れがあるなど広域にわたり、震源は白川断層とも伊勢湾とも、別の二つの地震が続発したという説も掲げている。

次に、年代は前後するが、『[5]新潟県史』にある康和一年（一〇九九）四月の「越後・越中・加賀・能登に大地震」（異本塔寺長帳）は、「年表」では、その年二月に発生した「南海道・畿内・興福寺（西金堂倒れる）・摂津天王寺で被害、土佐で田千余町海に沈む津波があった」という地震（M八～八・三）のみ伝え、この四月の地震のことは記録していない。



こんなときに地震が起こったら！

他には仁和三年（八八七）七月、越後西部に発生した地震の津波で千人もの溺死者を出したという記録もある。

師弟の見た大地震（おおない）

連歌師飯尾宗祇の終焉の顛末を弟子の宗長が記した『宗祇終焉記』[6]に、文亀一年十二月十日（一五〇二・一・八）発生した地震の様子が書かれている。

宗祇は、越後守護上杉房定・房能父子と親交があり、たびたび下向していたが、明応九年（一五〇〇）房能を訪ねて二年が過ぎたころ、宗長が越後府中へ宗祇を訪ねてきた。師との再会を果したものの病に罹り、ようやく癒えたころ、土地の人も「かかる雪には会わず」という大雪に、宗祇とともに越年することになった。そして十二月十日、

かくて、師走の十日、巳刻（午前一〇時ごろ）ばかりに、地震（ない）大きにして、まことに地にふり返すにやと覚ゆる事、日に幾度という数を知らず。五日六日うち続きぬ。人民多く失せ、家々転び倒れにしかば、旅宿だにさだかならぬに、又思わぬ宿りを求めて、年も暮れぬ。

という地震に見舞われた。

M六・五～七の規模で、越後南西部を震源として特に越後府中（直江津）に甚大な被害をもたらした。

頸城三大地震

百年後の慶長十九年十月（一六一四・一一・二六）の地震は、「越後海嘯、津浪あって死人多し」[3]といわれている。しかし史料が少なく、従来、越後高田の地震とされていたが、京都付近の地震という説[1]もある。

寛文・宝暦・弘化の地震は「頸城三大地震」あるいは「藩政時代の三大地震」とも言われ、上越地方に大きな被害をもたらした。

寛文大地震（高田地震）

寛文五年十二月二七日（一六六五・二・一）夕方四時頃、M六強の大地震が発生した。高田城下の町家のみならず城の建物もことごとく破損し、侍三五人、その家族一二〇人、町人一五〇〇人余が死亡したといわれ、家老の小栗五郎左衛門・荻田隼人も圧死した。

この年は積雪四・二メートルの豪雪で、慌てて屋外に飛び出し雪の下敷きになり、あるいは雪氷（つらら）に刺されて死んだ者が多かったといわれている。それ以来、雪下止（なで）めを屋根に上げるようになり、雪囲いの時は家の出入り口を二つ設けるようになった。またこのとき、城下の出入り口に「この下に高田あり」という立て札を立てて目印にしたといわれている。

父に替わって家老になった小栗美作は、幕府から三千俵の米と五万両を借り、城の修理と藩内の復興に充てている。高田の町では、現在の本町通りには間口一間につき一両、その他の町もそれぞれ金額を変えて貸し与えられた。このときの美作の城下復興計画により現在見ることが出来る高田の街並みがほぼできあがったといわれている。

越後国頸城郡高田領往還破損所絵図（上越市史編纂室所蔵）

宝暦地震における北陸道の破損個所を能生町徳合から上越市居多まで、海上から見たように描いている。本図は兵庫県の佐野氏から寄贈されたもので、佐野家の先祖に高田藩士の養子になった人がいて、実家へ地震のようすを知らせる際いっしょに送ったものであろうと思われている。原図は高田藩が幕府へ届け出た被害状況報告に添付されたものと考えられている。（上越市史・通史編3・近世一）

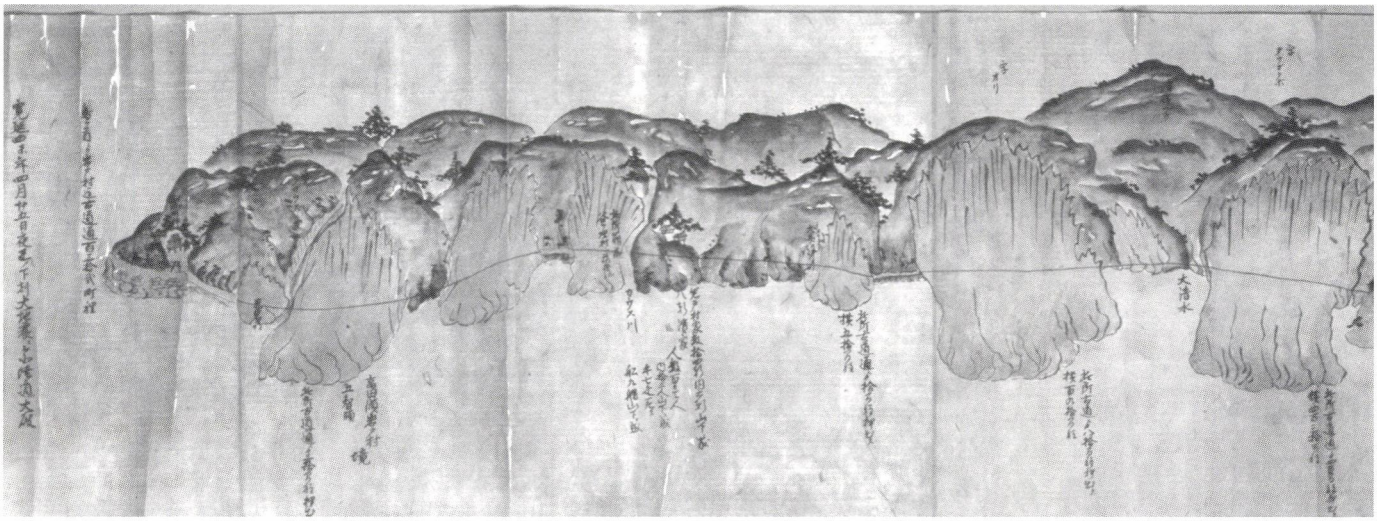
＊

橘南谿　江戸末期の医師・文人　伊勢の人　全国を回遊し「東路記」「西遊記」などがある。

高田領岩戸村境付近

五智領

居多村



宝暦大地震

頸城の三大地震のうち最大の被害をもたらした宝暦大地震は、寛延四年四月二六日（一七五一・五・二一　一〇月に宝暦と改元してこの名が付いた）、午前二時に発生した。地震規模はM七～七・四。[7]「直江津今町笘屋文書」には「地震前に妙高山大いに鳴り響き光り物出（いで）、五智の方へ飛ぶ」と、地震の前触れがあったことが書かれている。

高田藩内で死者八六七人、行方不明二六二人、家屋全半壊九一四八軒、その他長屋七七棟。以上が幕府への公式の届けになっているが、実際にはもっと被害は大きかったと想像されている。

震源域の上越西部は想像を絶する被害を受けた。桑取川に崩落した土砂が流れ込み、翌日、土石流となって有間川宿を襲い、二七〇人中五八人の死者と五軒の家を残して全て流された。現在の川筋はかつての宿跡である。桑取谷の集落も壊滅に等しい被害を受けた。今、灌漑に利用されている東吉尾池は、この地震によって生れたものである。

虫生村は家十五軒、船十四艘が山崩れの下敷になり、人口一〇〇人のうち六一人が圧死、岩戸村では十四軒中十二軒が潰れ、二三人の死者を出した。

街道が寸断されたため、この年は北陸の諸大名の参勤交代ルートが変更され、幕府は二千両をかけて復旧に当たり、十一月末には馬が通れるようになった。

この地震を最も有名したのは、戯曲「名立崩れ」であろう。天明六年（一七八六）、橘南谿（たちばなんけい）は『[8]東遊記』の旅で名立を訪れ、

―今より三十七年以前に、上名立のうしろの山二つに分かれて海中に入れり、一駅の人馬鶏犬ことごとく海底に没入す。その割れたる山の跡、今も草木無く、真白にして壁の如く立てり―

と記している。

夕方から漁に出ていた村人が、名立の空が一面に赤いのを見、慌てて引き上げたが何事も無く、ほっとしていたところへ、夜半過ぎ鉄砲のような音とともに山が崩れ、ことごとく海に流された。赤い空を火事と間違わなければ、漁に出ていた者だけでも助かったものをと言う、村人の話も伝えている。そして「大地震(おおじしん)すべき地は、遠方より見れば赤気立(あかきた)ち上りて火事のごとくなるものなり」と結んでいる。

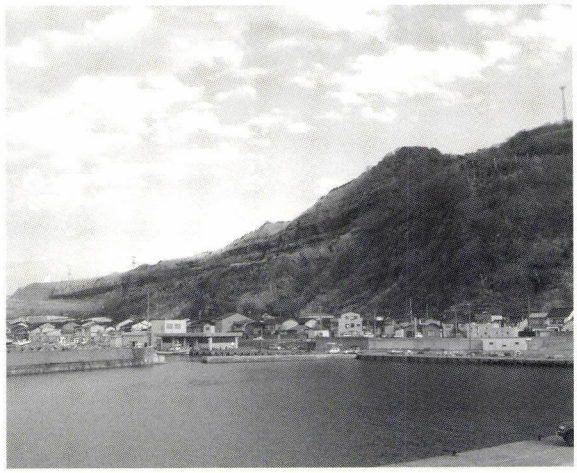
この紀行文を岡本綺堂が戯曲化し、大正十三年、帝劇で上演された。

その日、梶屋敷陣屋へ出向いて助かった名立の庄屋池垣右八の報告書によれば、村人五二五人中、四二八人が死亡、九一軒の民家のうち八一軒埋没および流失、七軒の全半壊、潰れた船十三艘。生き残った者一〇〇人のうち四〇人は奉公に出ており、僧侶、重傷者を除くと働ける者は七～八というありさまで、そのうえ火災も発生し、人びとは着の身着のままで名立大町村の裏に小屋をかけて細々とした生活を送ることになった。[4]明治になっても復興は進まず、昭和の初めになってようやく被災当時の戸数に戻ったと伝えられている。（名立は幕府直轄領であったため、高田藩の被害状況には含まれていない）

高さ一四〇メートル、幅六〇〇メートルにわたる当時の崩落の生々しい爪痕が今も残っている。

名立谷の各村々も大きな被害を受けているが、[7]旧小田島村に次のようなエピソードが残っている。小田島村の全家屋十二戸が背後の山の崩落によって潰れ、三八人の死者を出した。そのうちの八家が断絶し、昭和二九年に至って、ようやく旧村民の手によって供養塔が建立された。この崩落で佐七の女房の生家も絶家し、被災三十年後に生家再興のため離縁を願い出て許された。地震の被害から婚家が立ち直るのを見届け、佐七との子どもを一人連れて出たのであろうという。佐七は、被災後の女房の働きに感謝して高三斗五升の土地を譲り、家の新築を大肝煎に願い出てやっている。

『直江津町史』に載る「福永家文書」には、今町では、地面が大きいところで二メートル近くも割れて水が噴出し、井戸水も吹きあがり、町内には三〇センチ余りの水が溜まって、町の人々は津波だとして砂山へ避難したとある。





上　名立崩れの跡

下　竜宮の鐘　宗龍寺蔵　上越市名立区（旧名立町）

宝暦地震の数十年後、小泊の沖合に怪音が聞えるという噂が立ち、地震の犠牲者の亡霊、あるいは再び地震が起こる前触れではないかと、恐怖に慄き、怪音に近づいてみる者も無かった。明治初年に至って、漁士が岩間にはさまれた梵鐘を発見して引き上げ、元の宗龍寺に納めた。この鐘が潮流の変化によって音を発していたのである。後に小泊の人たちは、「竜宮の鐘」と呼ぶようになった。町民の尽力で太平洋戦争の金属供出も免れている。（名立町史）

同書の町内別被災家屋数を見ると、砂丘上の町の損害が少なく、町の人たちが単に高台へ避難しただけではなく、このあたりが安全だということを経験的に知っていたのではなかろうか。

また、二六日昼頃に至って、船が入ってきて食物を届けてくれたともある。

このとき幕府から災害復旧費として一〇カ年賦・無利息償還で一万両の貸し付けがあり、今町にも高田藩を通して一五〇両の割り当て↘があった。しかし、それを藩に貸し付けて領内の復旧に充ててもらい、利息のうちから償還金と今町の復旧費にあてている。

＊

この地震以降、弘化の地震まで、三条・見附の信濃川流域で起きた激震など数回大きな地震も発生しているが、上越地方の被害の程は不明である。そのなかで、天保四年十月（一八三三・一二）に発生した地震は、山形・秋田・新潟・佐渡・能登に大きな津波が襲っている。

高田藩士が書いた「鮒井雑記」[9]に、「高田にてもよほど強き地震致し、今町などは別して強かりし由、下越後新潟は大津波にて殊のほか、死人多くこれあり」として、次のようなことを伝えている。

新潟でこの大津波に遭遇し、幸いにも大木によじ登って難を逃れたという高田御馬出しの何某は、身元不明者のなかに、商用で来ていた春日町の四十物商（あいものしょう）・多喜兵衛を発見し、↖役人が懐中の物を確認したうえ、多喜兵衛の遺骸は無事高田へ帰って葬られたという。

また「北海には津波と申すことは、これ無き物と予て承りおりしが、この度の趣にては、左様もこれなく事と相見ゆるなり」と感想も書き残している。

弘化大地震（善光寺地震）

弘化四年三月二四日（一八四七・五・八）午後九時、現長野市西方を震源とし、M七・四の地震が発生した。

おりしも善光寺本尊の御開帳で、全国から参詣者が集まっており、住民・参詣者合わせて一万人以上の死者が出たといわれ、のちに「善光寺地震」と呼ばれるようになった。

宝暦地震より被害は少なかったとはいえ、高田・今町合わせて三五〇人の死者があったという。

直後の二九日（一三）昼にも地震があり、今町では火災が発生して九五七軒焼失し「地震火事」と呼ばれるようになった。

この地震の模様を直江津の真行寺住職智亮[10]が書き残している。

―夜四ツ時少々前、一陣の風のごとく吹き来る声夥しくしてすぐさま震え来る。―天地も混ずるかと覚え候。その間やや暫くにして諸人歩行ならざるゆえ、唯、天地に号叫する

上　名立崩れ犠牲者の無縁塚　上越市名立区（旧名立町）
写真中央が小泊の人たちによって建立された無縁塚。その真後ろに名立大町の人々によって先に建てられた供養塔がある。
右手前の石碑は、昭和24年に発生した機雷爆発事故犠牲者の記念碑。県内の教職員・児童生徒の募金によって建てられた。

下　宝暦地震供養塔　海隣寺境内（上越市高田寺町）

＊

「鮒井雑記」の鮒井とは府内のことで、榊原藩士が文化3年（1806）から天保七年（1863）頃までの30年に藩内外の出来事を記した。『越後府中雑記』に著者中沢肇が、当地に関わるもの、また興味深い出来事を抄録している。







善光寺地震で土台石とずれたままの善光寺本堂の柱（長野市）。向拝の4本の柱を見ると、同方向に均等にずれていることが分かる。

のみ。豈この難、何にか喩えん、逢ざる者これを知らざるべし。―諸人、魂を身におかず茫然の有様なり。―

「一陣の風」については、「郡史稿」にも「西北ノ方ヨリ大風ノ発スル如ク震動シテ」とある。

また同書は、高田城の堀の魚が死んで水面が真っ白になるほど浮き上がり、トンビ等の鳥が群集した。地震以降、晴天が続き、浜方では鰈・鯛・鰯に至るまで大漁だったとも伝えている。

この月の晦日、八坂神社に金百疋を献じて地震退散の祈祷をした。

弘化の地震の頃になると大きな経済力を持つ富裕階層が現れ、その人たちが地震に際して有縁の地に多額の義捐金や米を届けている。[11]

川浦代官所支配の村々へ、浦川原の石田源左衛門の四百両を筆頭に、十七人で合計千両の義捐金が届いた。その他、米も多量に支給している。このような救援は、代官所支配下の北蒲原郡水原村の豪農市島氏と有志からも八百両余の義捐金が届けられた。

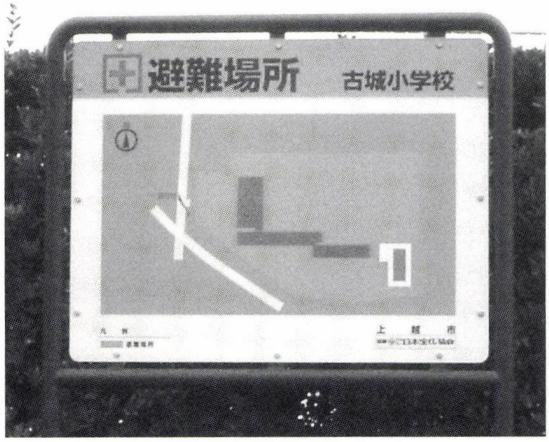
＊

弘化の地震以後、何度も地震は起きているが、それほどの被害の記録も無く、昭和三九年（一九六四）六月十六日の「新潟地震」、今回の「新潟県中越地震」も大きく揺れはしたが、上越地方に被害をもたらすほどではなかった。

しかし、上越地方に甚大な被害をもたらした弘化大地震から一六〇年近く、「郡史稿」は「必ス七、八〇年ヨリ百年ニハ一度此災害ノ順廻スルヲ知ル」と警告している。

参考資料

1『理科年表』（卓上版・七八刷）㈱丸善
2『訂正・越後頸城郡史稿』上
3『直江津町史』直江津町
4『新潟県の地名』日本歴史地名体系15　平凡社
5『新潟県史』資料編2　古代二　文献編
6『中世日記紀行集』新日本古典文学大系51　岩波書店
7『名立町史』名立町
8『東西遊記1』東洋文庫243　平凡社
9『越後府中雑記』中沢　肇　北越出版
10『直江津こぼれ話』中戸賢亮　北越出版
11『上越市史』通史編3　近世一
『上越市史』資料編3　古代・中世
『続じょうえつ市の郷土史散歩』池田嘉一・渡辺慶一　北越出版
『桑取文化の記録』―桑取谷文化資料・斎京守保―上越市史叢書3



上越市は、阪神淡路大震災、7.11水害を受けて地震・水害・台風などに対して「防災ガイド」を作製し、学校・公共施設を中心に避難場所を設定した。現在これらの情報は、上越市のホームページでも閲覧できるようになっている。避難場所には写真のような看板が設置されているが、避難場所への距離・道順・位置などを示した看板が無い。せめて、長野市内に設置されている「○○避難所まで200メートル」のような看板の設置が望まれる。

上越地方の地形と地震の可能性

高野武男 たかのたけお

上越地方の山々と平野

上越地方の地形を構成する地形地域としては、飛騨山脈、西頸城山地、高田平野、米山山地、関田山脈、妙高火山群などがあげられる。そのほかに、東頸城丘陵、西頸城丘陵がある。しいてあげれば西頸城の糸魚川、能生、名立などの狭い海岸平野があげられる。

大断層で限られる飛騨山脈

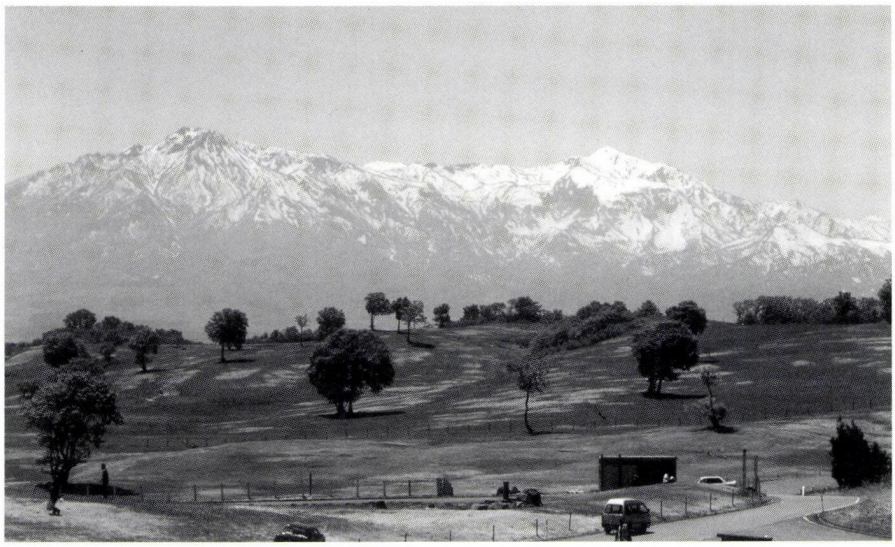
飛騨山脈は、青海の黒姫山の石灰岩で知られているように、古生代の約三億六千万年から二億四千万年も前の石炭紀と二畳紀と呼ばれる地質時代の堆積岩や変成岩をはじめ、中生代の約二億年から六千万年も前のジュラ紀と白亜紀と呼ばれる恐竜の時代の手取層群や来馬層と呼ばれる堆積岩や花崗岩によって構成されている。日本列島では最も高い山々の聳える地域の一つである。また、地盤の隆起量の最も大きい地域でもあり、激しい侵食作用にさらされ、険しい山々が聳え氷河地形の発達していることでも知られている。三千メートルちかい山地が急斜面をもって日本海に接し、そこには昔から知られた親不知の交通の難所が形成されている。いわゆる断層山脈で、東側を限る断層が糸魚川・静岡構造線の大断層線である。

東北日本で最も高い火打山

西頸城山地は約二千三百万年から二百万年前の新第三紀と呼ばれる地質時代の地層で構成されている。この時代、下部の古い地層はフォッサマグナと呼ばれ、糸魚川・静岡構造線を西の境として、日本列島を横断し日本海と太平洋を繋ぐ大陥没帯の海に堆積した、砂岩と泥岩とが交互に堆積した互層を主としている。新しい地層は、フォッサマグナの海が埋め立てられ、長野県の松本市に達する日本海の大きな湾入部に堆積した、泥岩質の地層によって構成されている。

これらの地層が高く隆起して形成された西頸城山地は、南葉山（九四九m）、重倉山（一〇二九m）、大毛無山（一四二九m）としだいに高くなり、最高点の火打山（二四六二m）に達する。火打山は新第三紀層の山の中では東北地方で最も高い山である。西頸城山地の南に連続する長野県の筑摩山地を含む地域の河系図（水系図）をみると、火打山を中心とした放射状の河系が発達している。これは火打山がこの地域においては地盤の隆起運動の中心に位置していることを示すものと考えられている。

さらに、西方には雨飾山（一九六三m）が聳え、その北には鋸岳（一六三一m）、駒ヶ岳（一四八七・四m）、烏帽子岳（一四五〇・五m）、鉢山（一五七五m）などの海川山塊の山々が位置している。これらの山々の中には火山斜面に似た緩斜面を発達させているものがあり、これらの山々を構成する火山岩は基盤の新第三紀層を不整合で覆っている。したがって、これらの山々は一つの古い火山であつた可能性が考えられる。



光ケ原から望む妙高山・火打山

貫入岩体からなる南葉山

これらの山々のほかに、鉾ケ岳（一三一六・三m）や権現岳（一一〇四m）のような閃緑ひん岩の貫入岩体による山もみられる。非常に険しい山体を構成し、とくに権現岳の東斜面は急傾斜で、昭和六一年（一九八六）一月二六日に、柵口集落で死者十六名をだす雪崩災害を発生させている。貫入岩体の山としては名立川上流の不動山（一四三〇m）、西頸城山地で最も高い火打山がある。両者とも尖鋒を形成しているが、火打山の貫入岩体はやや小規模である。いっぽう、同じ貫入岩体の山でも南葉山は頂上が平坦で、他の貫入岩体の山との違いが大きい。

南葉山山頂の平坦面は、西頸城山地が形成される一時期に、「原初準平原（げんしょじゅんぺいげん）」と呼ばれる平坦な地形が発達したことを示すものだと言われている。

褶曲山地としての西頸城山地

西頸城山地を構成する地層は隆起運動とともに褶曲作用を受け上下に何回も湾曲している。地層が上に凸に湾曲した部分を背斜、下に撓んだ所を向斜と呼んでいる。地層は、ある距離をもつて湾曲したり、撓んだりするので、その凸部と凹部を連ねた線を背斜軸および向斜軸とよんでいる。

西頸城山地には、この背斜構造と向斜構造がよく発達しており、背斜軸と向斜軸が何本も知られている。最もよく知られているのは、図1（22ページ）に示されるように郷津海岸からほぼ南西に延び、長さ二十キロメートルにも達する難波山背斜と、その西に位置する名立向斜である。さらに、西には海岸から鉾ケ岳に向かう東崎背斜が延びている。そして、妙高火山や焼山火山の北方、糸魚川市街の南東方などにも褶曲構造がみられる。

このように、地層の褶曲構造の発達によって特徴づけられる山地は褶曲山地とよばれている。しかし、褶曲山地であっても褶曲構造だけでなく断層も発達しており、難波山背斜と名立向斜の間には紫雲谷断層と神葉沢断層が走っている。これらの褶曲構造と断層とが後に述べる高田平野の地震災害と大きく関係していると考えられる。



ＪＲ直江津付近から見る権現岳・鉾ケ岳。手前は春日山

地すべりの発達地としての丘陵

西頸城山地の海岸地帯には西頸城丘陵が分布している。また、米山山地の周辺から関田山脈の北麓には東頸城丘陵が広がっている。

丘陵は、およそ二キロメートル四方の地域で、最も高いところと低いところの標高差が四百メートル以下で、標高が約八百メートル以下の地域である。海岸地帯では標高二百から三百メートルの地域が多い。

丘陵も未固結で泥岩質の地層の分布地域が多く、そこは地すべりの発達地になっている。

残丘としての米山山地

米山山地は、米山（九九三m）、尾神岳（七五七m）、兜巾山（六七六m）、鷲ノ巣山（六二四m）、黒姫山（八九〇m）などの山々を総称している。いずれも千メートル以下でそれほど高い山ではないが、東頸城丘陵の中に突出している点が特徴的である。それは、これらの山々を構成する地質が、火砕岩と呼ばれる、海底火山の噴出物が硬く固まった地層から成り立っているためと考えられる。その地層は東頸城丘陵を構成する地層と同じ時代に堆積したものである。丘陵地でも褶曲構造が発達しており、背斜部では厚さが三千メートルを超す地層が、侵食されたことが知られている。したがって、丘陵地の泥岩質の地層に比較して非常に硬いために、侵食されずに高く聳えているものと考えられる。

このように侵食されずに、周辺より高く突出する地形は残丘とよばれている。米山山地は残丘と呼ぶにふさわしい地形である。

日本一の高さを誇る関田山脈

関田山脈は北西に凸面を向けて延びる山脈で、北端の天水山（一〇九〇m）から菱ケ岳（一一二九m）、黒倉山（一一二四m）、鍋倉山（一一八八・八m）、仏ケ峰（一一四〇m）、毛無山（一〇二二m）などをへて、南端の斑尾火山（一三三二m）に至る、長さ約三四キロメートルの山脈である。この山脈の特徴は稜線部が地質時代の最も新しい時代の第四紀層によって構成されていることである。それで、第四紀層で構成されている山脈としては日本一高い山脈であるという。これは関田山脈の第四紀の隆起量が大きいことを意味しているものであろう。この地域には高田平野の低地では感じられない局地的な地震が時どき発生すると言う。これは関田山脈の隆起運動に起因するのではないかと推察される。

開田山脈の高田平野側の斜面は著しい崩壊地形の発達地で、板倉の光ケ原をはじめ安塚の菖蒲高原、松之山の大厳寺原などの崩壊地形に起因する平坦面が分布し、牧場などに利用されている。関田山脈の前面には、すでに述べた東頸城丘陵が分布し、地すべり地形の発達地になっている。東頸城丘陵も新潟県中越地震で震度六の震動を受けている。融雪期に地すべり災害の多発することが心配される。



吉川区から見る米山

富士火山帯の北端の妙高火山群

妙高火山の周辺に位置する黒姫火山、飯縄火山、斑尾火山および焼山火山を総称して、妙高火山群とよんでいる。なかでも、焼山火山はよく知られた活火山である。しかし、妙高火山も過去一万年前以降に活動した記録が明らかなことから、気象庁によって活火山と認定されている。これらの火山の他に、妙高火山の西側の高谷池や天狗原の地域にも、妙高火山に匹敵する規模の茶臼山火山が、かつて存在したことが知られている。また『妙高村史』編纂のための調査によって、妙高火山の北方に容雅山火山と呼ばれる小火山が発見されている。また、妙高火山は約二万年の前の大崩落によって馬蹄形カルデラを形成したことも明らかにされた。

妙高火山群は、すでに述べたフォッサマグナの中に南北に延びる富士火山帯の北端に位置しており、その一員をなすものである。

不等辺三角形の高田平野

高田平野は、ほぼ北北東・南南西方向に延びる、東側の東頸城丘陵との境、ほぼ南北方向の西頸城丘陵との境および直江津から柿崎に至る北東・南西方向の海岸線によって限られる、不等辺三角形の平野である。

平坦で、一面に水田が広がり直江津や高田、新井の市街地の位置するところは、高田面と呼ばれる地形面である。しかし、その下位に関川面があり、さらに下位に関川氾濫原面が形成されている、といった具合に、けっしてまっ平らな地形ではない。西側の丘陵との境には裏山面、高田の愛の風公園や新井の斐太遺跡の位置する愛の風面、上越教育大学が置かれている平山面などの段丘あるいは台地の地形が分布する。この台地は吉川や柿崎、三和、板倉などの地域にも分布している。また、海岸地帯には潟町砂丘と呼ばれる海岸砂丘が発達している。

このように、平坦に見える高田平野も詳細に観察すると、さまざまな地形が組み合わさっており、複雑な構造をしていることが理解される。

地震に弱い上部高田層

とりわけ最近の地震災害に関して重要なのは、高田面を構成し、その地下に堆積している沖積層の高田層である。直江津から脇野田付近まで、地下六〇から三〇メートルにわたって、粘土やシルトを含む地層が堆積している。とくに、表層の上部高田層の三〇から一〇メートルの層準は軟弱である。

地震の原因となる活断層

高田平野の東縁部には、図1に示されるように、地震の原因になる活断層が何本もはしっており高田平野東縁断層群と呼ばれている。

日根津断層は丘陵や段丘と高田面との境が直線状であること、ほくほく線のトンネルの出口で、原之町段丘を構成する地層が切断されていることが判明したために判断された。

六万部断層は丘陵を構成する新第三紀層が断層で切断されており、この断層に沿って原之町段丘の面が南に向かって低下していることから判断された。

水科断層もやはり丘陵と高田面の境が直線状であること、飯田川の平野への出口で平山段丘に相当する段丘が断層で切断され、平野側が落ちこんで上下に食い違っていることから判断された。食い違いの速度は千年に一・二五メートルの割合で、断層の活動度はA級

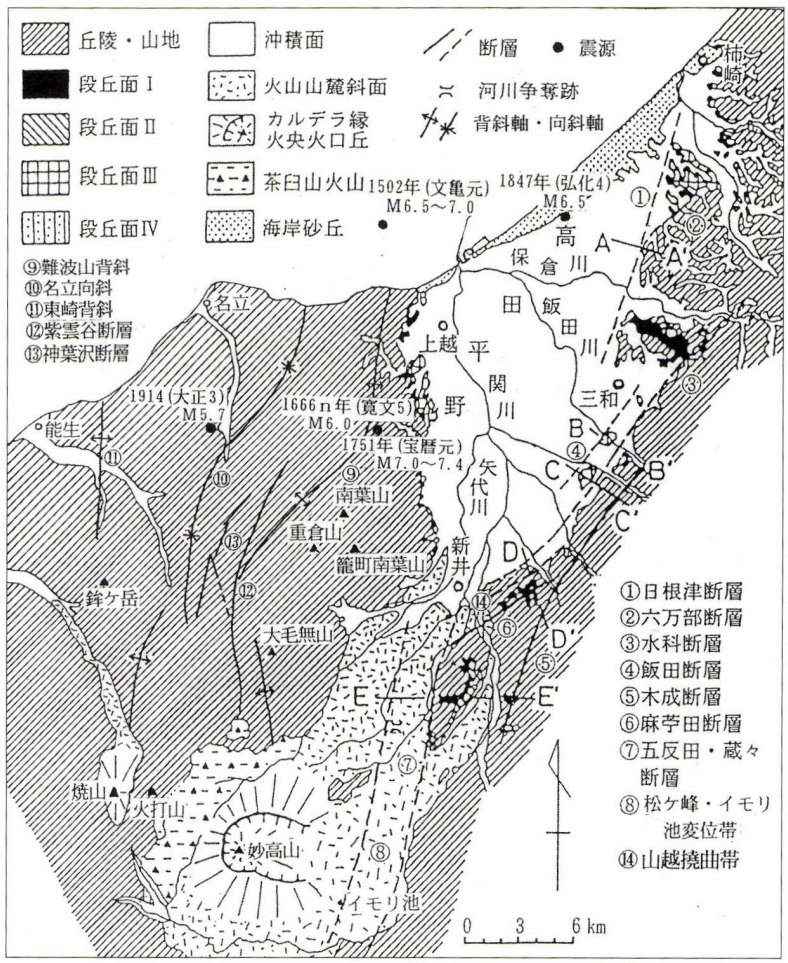


図1　高田平野と西頸城山地の活断層、活褶曲および震源の分布
（西頸城山地の背斜軸、向斜軸及び断層線は「新潟県地質図 2000年版」による）



ほくほく線のトンネルが抜ける山裾に日根津断層がはしる



麓を水科断層が通る岩の原葡萄園の山を望む



民家の後方に飯田断層の断層崖が観察される飯田集落

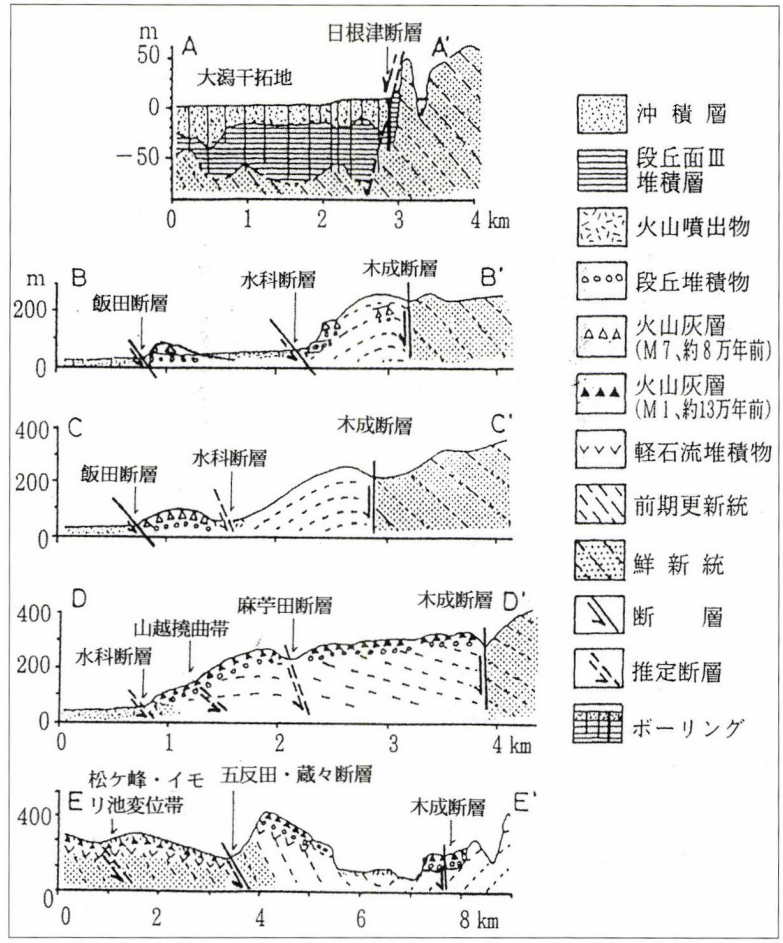


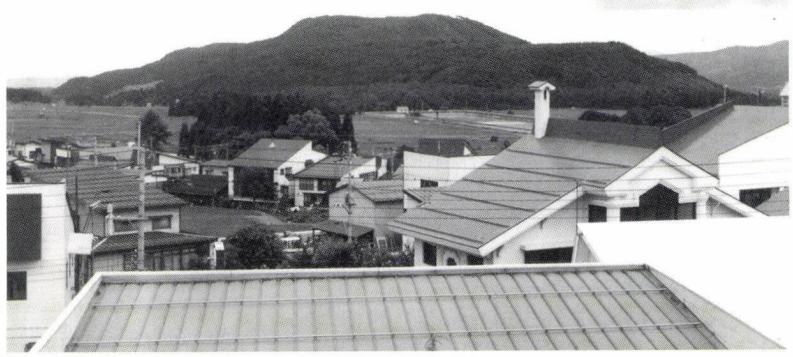
図２　高田平野および妙高山麓の活断層を表現する地形断面図
断面線の位置は図１に示されている。MI、M７は鍵層となるスコリア層や軽石層の名まえと堆積の順序を表わす記号である。
多くの断層が逆断層であると推定されているが、解明されていない点が多いので、全体像の把握は今後の課題である。

で、最高から二番目の相当に激しい断層であることを示している。

飯田断層は平山段丘に相当する段丘が断層によって切断された断層崖が、飯田の集落の東側で、民家の裏で約一キロメートルにわたって観察される。断層の落差は八メートル以上と推定されるが、落ち込んだ段丘面が堆積物に覆われているので明らかではない。

木成（こなり）断層は主に丘陵地に延びる断層で、新第三紀層を切って西側が落ち込んでいる。その落差は四百から五百メートルに達するという。新井の大貝や猿橋では段丘面を変位させている。

麻苧田（あそだ）断層は板倉の峰山で、愛の風段丘に相当する段丘面を刻む谷の直角にちかい屈曲部が連続する、断層地形が観察されること、高床山に位置する愛の風段丘より高位の段丘が、高床山の北側の急斜面で断ち切られていることなどから判断された。この断層は上越



高床山麓に五反田・蔵々断層がある
（村立妙高中学校の屋上から望む高床山）

地方には珍しい右横ずれ断層である。

山越撓曲帯は山越段丘が崩壊地形を発生させるほどに、著しく撓んでいることから、地下には基盤の逆断層が存在したものと推察され設定された。

高田平野の西縁部においても、平山段丘の先端と高田面との境を連ねた線や愛の風段丘の段丘面の急傾斜部などに活断層が存在するのではないかと考えられている。しかし、東縁部のような明確な活断層の証拠はまだえられていない。

妙高山麓に走る活断層

妙高火山の山麓にも五反田・蔵々断層と松ケ峰・イモリ池変位帯の二本の活断層が、ほぼ南北方向に走っている。

五反田・蔵々（ぞうぞう）断層は高床山の西麓や南の丘陵と妙高山麓との境が直線状であること、高床山に位置する愛の風段丘に対比される段丘が、高床山の西側の急斜面で断ち切られていることなどから判断された。ここでは段丘の形成時代は約十三万年前、断層の落差は一八五メートル以上で、千年に一・四二メート以上の速度で落ち込んだことを示し、活動度はA級である。

松ケ峰・イモリ池変位帯は、大沼原の隆起とその西側の渋江川沿岸地域の沈降、松ケ峰北方で片貝川に合流していた渋江川が地盤の隆起によって現在のように流路を変更した（河川争奪）跡が見られること、その南方では山麓斜面の撓みによって大田切川や白田切川の谷が浅くなり、イモリ池の湿地が形成されていることなどにより判定された。おそらく、地下では西側の基盤が落ち込んでいるものと推察される。

西頸城山地が被害地震の震源

宇佐美龍夫著「新編日本被害地震総覧（増補改訂版）」（東大出版会、一九九六）によると、上越地方で発生した被害地震について、震源の位置が推定されているものは次の五個である。

一五〇二年（文亀元）M六・五～七
東経一三八度十二分
北緯三七度十二分

一六六五年（寛文五）M六・〇
東経一三八度十二分
北緯三七度六分

一七五一年（宝暦元）M七・〇～七・四
東経一三八度十二分
北緯三七度六分

一八四七年（弘化四）M六・五
東経一三八度十八分
北緯三七度十二分

一九一四年（大正三）M五・七
東経一三八度六分
北緯三七度六分

これらの被害地震の震源の緯度と経度をみると、いずれも同じような値があげられている。これは一九一四年以外はすべて推定によっている結果であろう。

次に興味の持たれることは、すべての震源の位置が確実な活断層の分布する高田平野の東縁部ではなく、西頸城山地と難波山背斜の

延長である海底や潟町砂丘の背後の地点に求められている点である。これは先に述べた西頸城山地の難波山背斜、名立向斜および東崎背斜などの褶曲構造や、紫雲谷断層、神葉沢断層などが、けっして過去のものではなく、現在も生きて活動している、いわゆる「活褶曲」であり「活断層」であることを意味しているものであろう。

それで、西頸城山地の地震発生の周期をみると、約半世紀から一世紀半の期間を置いて発生していることが分かる。それに対して、高田平野の東縁では、上越市出身の活断層研究者、東洋大学教授渡辺満久博士の私信によれば、日根津断層は過去四千年間に一ないし二回活動しているという。

このような資料から推定すると、西頸城山地の断層運動は発生間隔が短いために、記録や実体験として現代人にも感得されるが、東縁部ではその間隔が二千年から三千年というように長いために、文書の記録もないし、現代人には体験されないのではないかと推察される。

将来の地震の可能性

将来の地震の発生を正確に予知することは極めて困難である。地震学の専門家でも詳細に調査された活断層についてさえ、将来の地震発生の確率は何十年間に何パーセントというような表現しかされていないし、実際の地震は地震学者の想定しないところで発生している場合がほとんどであることからも肯けることであろう。

地震学者の説明によれば、日本列島は地震の活動期に入ったという。上越地方でもちかい将来の地震に備えた防災対策が必要であることはいうまでもない。その場合、地震の発生が予想される地域は西頸城山地で、想定される地震の規模はM六程度であろう。それは、過去の地震の規模からの推定であり、最も新しい一九一四年の地震から既に一世紀ちかい年数が過ぎているからである。

しかし、高田平野の東縁部でも地震の記録の無い期間は、すでに二千年にわたっている。この地域でも、ちかい将来に地震が発生しないという保証はない、ということを心がけて生活することが必要であろう。

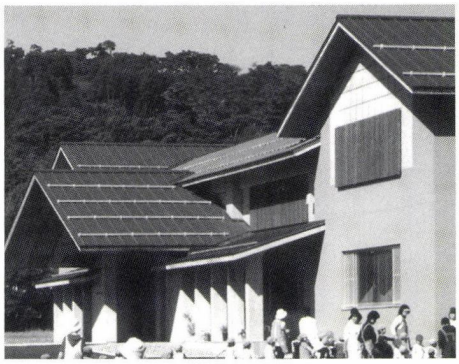
筆者プロフィール
上越市市史編集委員／地学団体研究会会員
元新潟大学非常勤講師



2月5日、高田の町家の見学と、昭和30年代まであたり前だった冬の防寒着「かくまき」と「とんび」姿を再現してまちを歩いた。

7人の女性たちが企画した、この催し物は大変好評だった。

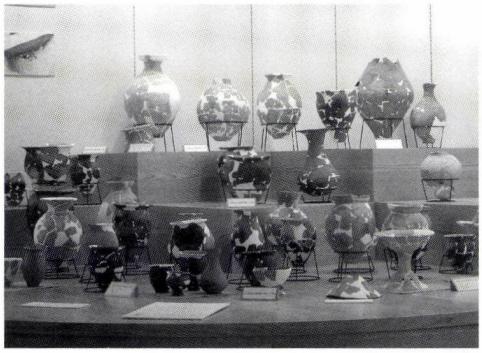
カメラの眼



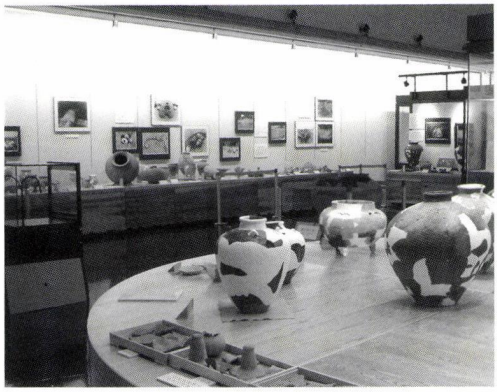
埋蔵文化財センターは本来、遺跡から発掘された出土品を調査・復元・保管する施設だが、上越市埋蔵文化財センター（埋文センター）は、従来の同種の施設に比べ展示室が大変充実しているのが大きな特徴と言える。

また、展示室は特別なものを除いてケースに収納されていないので、博物館とは一味趣が違って「生の出土品」を手に取るようにして見ることができる。そのためか展示品の質感のみならず、その時代の空気まで実感できるような気がする。その他、めったに見る機会のない収蔵庫の中や作業中の様子も回廊から見学できる。

無料で入館できるので、散策の途中、一服気分で覗いてもいい。春日山への道の途中、春日山荘の向かい側にある。



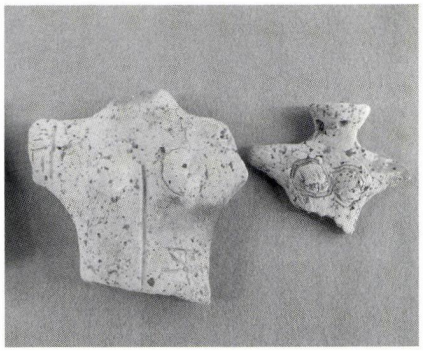
展示室





上教大のある山屋敷１遺跡出土の縄文土器

土　偶



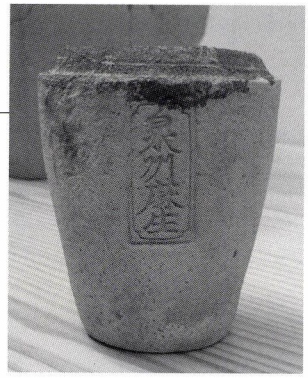
織部柳図徳利

あまりにも自然に展示されているので見落としそう。





奈良時代の海獣葡萄鏡や銅印、石帯の飾りなどが並ぶ。



焼塩壷

高田城跡の出土品



越前焼の大甕



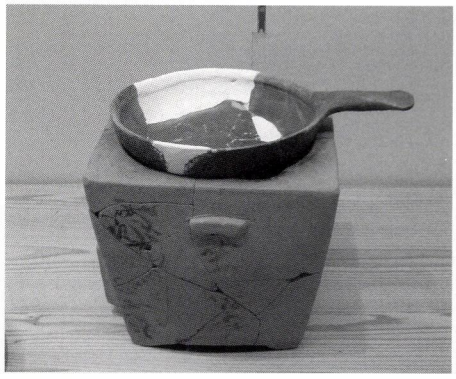
海中から引き上げられた壷



オランダ製の絵皿



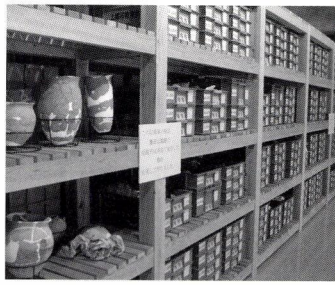
出土品と共に遺構や発掘作業風景がパネル展示されている。



コンロと焙烙

土器を実際に手にとってみるコーナーもある。

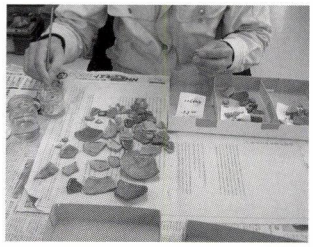




出土品が入ったコンテナが棚に整然と並べられている。

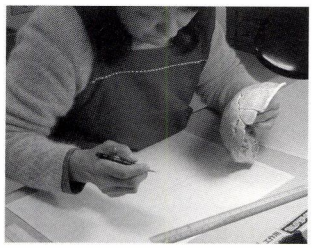
調査室では、張り詰めた空気の中で作業が行われている





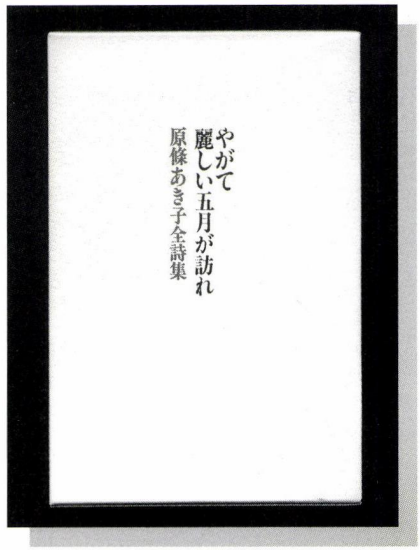






開館時間9：00～17：00・火曜日休館

■読書びと



やがて麗しい五月が訪れ 原篠あき子全詩集

池澤　夏樹編

書肆山田刊
三二〇〇円

この海辺の町にも〈シネコン〉が誕生したので、藤澤周平や高村薫など気に入りの原作映画に足を運び、勢いで『北の零年』を観る。

明治政府の下した一藩流罪ともいえる処分で北海道日高静内に移住した淡路の人々の物語は、わが南島文化と共に近代日本の倫理と自然観を撃つアイヌ民族の存在を、今こそ私達に問うものの筈だ。〈国家〉に裏切られた地を這う〈民衆〉が鍬を構え銃口に対峙する図、など左翼文化官僚にしか通用しない。田舎芝居ではあるまいに、余りに手抜きな脚本に鼻白んでいる。

開拓の時代が、〈異種〉の民族間に発生する空間であり、文明と自然、全ての邪なるものと自立する志、の相克の場なのだ、と池澤夏樹は『静かな大地』（二〇〇三年・朝日新聞社）で語る。「短い繁栄の後で没落した先祖たちのことを小説にするのは、彼らの物語を聞いて育ったぼくの夢だった。」と自註するように、池澤の母方の曽祖父達は淡路より静内に入植、アイヌの人々と協働して牧場を経営し、馬鈴薯と唐黍を作り鮭を孵した。直江の津五号に特集されたエドウィン・ダンや伊藤一隆も遠景として登場する。作家は北辺の先達たちから、日本の近代が棄てた価値観を学び、そして最愛の母よりリリカルで限りなく力強い言葉の力を教えられた。

『静かな大地』に主人公宗形志郎として登場する祖父原條迂（すすむ）の姓を、ペンネーム原條あき子として受継いだ池澤澄（旧姓山下）は一九二三年三月神戸に生まれ、日本女子大英文科に学ぶ。戦時下の一九四三年、若き福永武彦と出会い、彼が中村真一郎、加藤周一などの仲間たちと結成していた押韻定型詩の朗読サークル〈マチネ・ポエティク〉にただ一人の女性として参加する。翌年二人は結婚し、敗戦の前月には長男夏樹を儲けるが、清瀬のサナトリウムでの三年に亙る看護の時を経て福永と離婚。後に池澤喬と再婚して夏樹の妹を得、六人の孫に囲まれ一昨年、八十歳でひそやかにこの世を去った。早く詩を離れたマチネの同人の中で、終生初志を貫き、『原條あき子詩集』（一九六八年・思潮社）を世に送った。四聯十四行、ＡＢＢＡ等の形で脚韻を踏むソネットの詩型をこの国で実験し、戦後文学史に記憶される『マチネ・ポエティク詩集』にも採られた代表作『髪』の第一聯

わたくしのこの髪　天の使い達
ゆるやかな波のひだに憂い眠り
あわい緑の匂い　未来に映り
暮れて行く窓辺ひそかに時は経ち

昨年末上梓された『やがて麗しい五月が訪れ』には、六八年以降書き紡がれ手稿のかたちで遺された詩と、若書きの散文詩が加えられた。

晩年の『私のそばで眠るのはだれ』の最終聯

私の中に白い鳥がいて
帰れない旅へと私を誘う
私のそばに眠る人を捨て
飛び立とう　月へ　翼広げて

半世紀を隔てて世に出合った二篇の詩の距離に、「生きることは誓いにそむいて心を変えること、想う相手を変えることだ。」と言いきって、母と妻と女の内実を市井に貫き、池澤澄として死んだ一人の詩人の生が測れるのだ

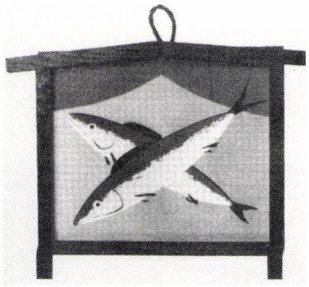
なつきよ　おまえの髪には　森の朝
燦く木の葉の匂い　風の息吹
眠りさめたまつ毛は花の茎
揺れて耀いてひらく湖（うみ）の深さ

『To my darling Natsuki 2』第一聯

と呼びかけられた息子は「母は最期まで徹底してリベラルな反戦主義者であった。戦後日本に絶望していた。」と語る。〈思いが形を求め、形は思いを育てる〉押韻定型詩の言の葉の際立つ透明感に、久しぶりに詩を読む（原條が望んでいたように朗読で）悦びを得た。

（振）

東海 東陸 西



サバ絵馬

県　外のデパートの地下売り場をうろついていたら「塩サバ」の隣に「サバの文化干し」という未知の〈サバ〉を見つけてしまった。トレイの表示を隣の塩サバと見比べてもどこがどう違うのか、皆目見当がつかない。だいたい、サバのどこが〈文化〉なのか。

分かってしまえば、ばかばかしくもあるのだが、昭和三〇年代に東京の水産加工会社が、魚の干物をセロハン紙でラッピングして売り出したら、大変きれいで清潔そうに見えたので〈文化〉の名前が付けられたのだという。その後、スチロールトレイや真空パックの技術が格段に進歩したため、今では、冷風乾燥機で干したものを「文化干し」と、水産加工業界では呼んでいる。

縁(ふち)を少し高くして蓋を落とすことで吹きこぼれを無くした「文化ナベ」・「文化カミソリ」・「文化刺繍」などなど、これらの〈文化〉は、どうも新式・便利・快適を意味しているらしい。

物　騒な話だが、殺傷事件の凶器に「文化包丁」がある。戦後開発された、ステンレス製の先が尖ったこの包丁は、野菜・魚・肉と相手を問わずに切れるところから三徳包丁とも呼ばれ、切れ味のよさから、最近では海外にも輸出されている。

ここで気づくのは、「文化包丁」が凶器に使用されるのは、関西方面に限るということである。関西にはもう一つ、限定品に「文化住宅」がある。昭和三〇年代から建築され始めた、風呂なし共同トイレの二階建てアパートのことだが、風呂・トイレ付きになった今でも、住宅情報誌のタイプの欄には「文化住宅」という表示がある。

この二つの名称は、関東（東京）には無いようだ。

その代わりと言うのも変だが、東京には〈村〉がある。近年では「渋谷文化村」というのもあるが、大正末に堤康次郎の箱根土地によって開発された「目白文化村」（落合文化村）は、電気・ガス・上下水道が完備され、今でも、その計画性が研究対象になるようなまちづくりが成された。

現　在の一般住宅の手本と言われている和洋折衷の内装、そして外観は洋風という住宅が建てられた。これが本来（？）、関西方面でも「文化住宅」と呼ばれていたものである。

そして中流より上くらいの会社員や学者・作家など、文字通り文化人が住人となった。（同時期に田園調布が東急によって開発されている）。

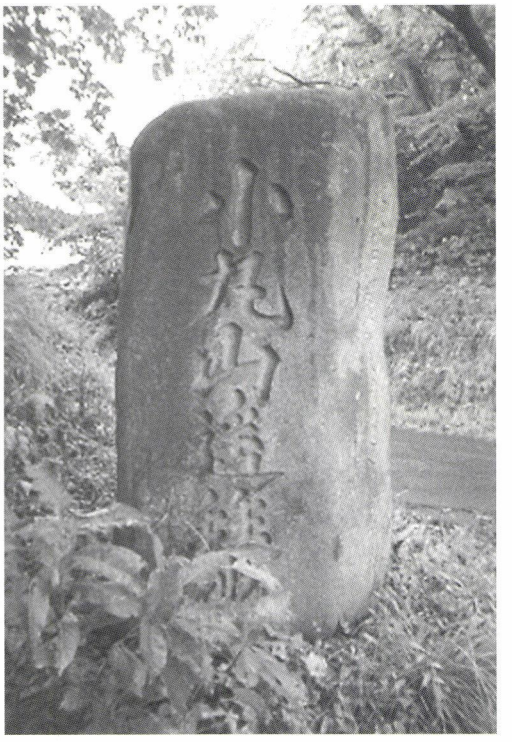
會津八一もこの村の住人であったが、戦災に遭い、収集した美術品や史料は「秋艸堂」と共にすべて失われ、故郷新潟を最期の地とすることになる。

サバからとんでもない方角へ歩いてしまったが、関西発の〈文化〉の冠ネーミングには、新式・便利・快適などの向こうに、どことなく偽物（東京的なものも含む）や安物に対する揶揄・嘲笑（自嘲もある？）を含んでいるような気がする。それを知ってか知らずか、東京の〈文化〉は、どこまで行っても、いかにもなのが可笑しい。

（津）

歴史の風景







右「小丸山遥拝地」の碑

左上　船倉集落の棚田を眼下に小丸山の地を望む。
写真ではよく分からないが、日本海を見ることができる。

左下　国府別院内陣の見上げ。

小丸山遥拝地の碑

国道二五三号線、大島の大平を保倉川に沿うようにして山道を走り、菖蒲で国道四〇五号線につきあたって進路を右に取り、坂道を登って行くと安塚との境、船倉の峠に至る。

眼下に船倉の集落を見ながらこの峠に立つと、遠く微かに海が見えるような気がする。そこに「小丸山遥拝地」の碑は建っている。文政十二年（一八二九）、「小丸山同行中」によって建立された。この峠に立って夕陽の方角、遥か小丸山の地に手を合わせるのである。

承元元年（一二〇七）、配所越後国府へ赴いた親鸞は、はじめ竹之内草庵に住み、後に竹ガ前（はな）草庵に移ったと伝えられているが、その竹ガ前草庵の地が小丸山である。

親鸞が赦免されて関東へ旅立って後、越後における唯一の弟子、覚善（上越市東本町三・安養寺の開基）が小丸山の地を守ったと伝えられているが、延宝九年（一六八一）、小さな燈篭が寄進されるまでの四六〇余年、どのようにして小丸山が「聖地」として伝えられていったかは不明である。

しかし「小丸山」を聖地として仰ぎ、その人柄を慕う思いが残ったということは、親鸞が頸城の各地に足を運び、人々と親しく言葉を交わしていたと充分に想像できる。遥拝地の碑は、頸城における親鸞を知るよすがと言えよう。

＊上越地方屈指の内陣を有する本堂は、文化二年（一八〇五）建立された。明治に至って「小丸山別院」、昭和五年「本願寺国府別院」と称するようになった。
（本堂内陣は市指定文化財）

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

■編集室から■

今年一月一日、旧上越市を中心に14市町村が合併して新しい上越市が生れた。これから新しい市がどのように展開していくか、傍観しているわけには行かないであろう。

前回の直江津地区に引き続き、新上越市のもう一つの中核となる高田地区の城下町としての性格を特集した。

また、昨年の中越地震をうけて、上越地方の過去の地震の記録と、上越地方の地形からみる地震の可能性を探ってみた。

二つの特集に大幅に紙面を割いたため、「ひろば」「久比岐つれづれ」は休載した。

第5巻2号　6月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

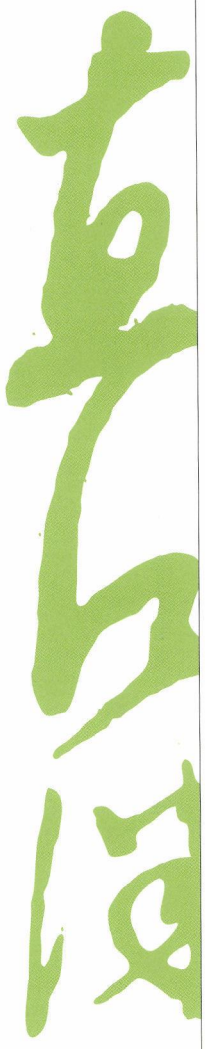
季刊「直江の津」春号
第五巻一号　通巻十七号
発行日／平成十七年三月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十七年三月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充



頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)